

# フィールドスタディ報告書

*Faculty of  
Humanity and  
Environment*



## フィールドスタディのすすめ

「フィールドスタディ」は、人間環境学部設立以来、続けられ拡充されてきたユニークな学習プログラムです。そして人間環境学部の DNA の 1 部分です。

「フィールドスタディ」は、キャンパスを出て、いろいろな自然環境や社会環境に遭遇し、現場の人々と出会うことによって、その場の状況を実感することを目的に設けられています。いわば、現場主義の学習プログラムです。

参加学生の学年は複数年に渡っており、多くのプログラムは 1 年のときから参加できます。そこでは短い期間ではありますが、「同じ釜の飯を食う」体験を通じて、みんなで打ち解けて楽しい時間を過ごすことができます。

しかし、「フィールドスタディ」はそれだけではありません。

皆さんがフィールドの現場に立つということはどういう意味をもっているのでしょうか。それは皆さんが訪れた現場が否応もなく、皆さんに何かを語りかけてくるということです。その場に立つ前には思いもよらなかったこと、なぜ? どうして? という疑問、そうだったんだ! という感覚……。本当に、さまざまなことが皆さんに押し寄せます。この体験が重要なのです。

そのためには、事前授業での学習も大切です。皆さんの事前の関心と自分へのインプットが現場での疑問や感覚の導火線となっているのです。そのいみで、「キャンパスでの学習」も「フィールドでの学習」もともに欠かせないものです。

事後講義も大切です。皆さんが「フィールドスタディ」で体感したものをみんなで議論することにより、それぞれの回想を定着させる役割をもっています。このように、「フィールドスタディ」によって、新たな興味がわき、学習意欲を喚起するきっかけともなります。

今、時代は大きく変化しています。ややもすれば、めまぐるしく変化する社会に翻弄され、自己を見失いがちになります。一方で、われわれがめざす社会は、人間と環境の調和・共生が求められる社会、すなわち持続可能な社会です。「フィールドスタディ」に主体的に参加することでそのような社会と一緒に考えるきっかけとしてみようではありませんか。



人間環境学部  
学部長 國則 守生

# Field Study Report

2012 / 国内

## Contents

【長野県】（飯田市、妻籠ほか）

### 環境と文化の都市・飯田のまちづくり、地域の伝統芸能と社会

安藤 俊次・辻 英史…5

【静岡県・群馬県】

（富士山周辺、伊豆半島、草津、嬭恋村、浅間火山）

### 富士・伊豆の自然と陸水環境

井上 奉生・長峰 登記夫…6

【埼玉県】（三郷市）

### 地域のなかで障害者と同じときを過ごす

國則 守生…7

【山梨県・東京都・神奈川県】

（小菅村、日野市、川崎市）

### 多摩川138kmをたどる！源流域から河口までの流域圏と持続可能な地域社会

小島 聡・朝比奈 茂…8

【東京都】（23区内）

### 東京いー散歩

後藤 彌彦…9

【新潟県】（上越市吉川区）

### ブナの森から農業と農村を考える

田中 勉…10

【東京都他】（国立科学博物館）

### 科学博物館で学ぶ

谷本 勉…11

【青森県】（鱒ヶ沢町）

### 自然エネルギー・自然保護と地域社会の再生

西城戸 誠・板橋 美也…12

【宮城県】（石巻市）

### 生業を中心とした地域社会のレジリエンス形成

西城戸 誠・辻 英史…13

【埼玉県・神奈川県・静岡県】

（さいたま市、箱根町、三島市）

### 歴史的環境の保全を考える

根崎 光男…14

【埼玉県・東京都・岡山県】

（小川町、倉敷市）

### サステナビリティ経営とCSRの源流を訪ねる

長谷川 直哉…15

【群馬県】（碓氷郡）

### 障害者福祉の体験

堀内 行蔵…16

【青森県】（五所川原市）

### 津軽鉄道が結ぶまちづくり

西城戸 誠…17

# Field Study Report

2012 / 海外

## Contents

【スリランカ】（コロンボ、ゴール、キャンディ）



開発途上国の人々の暮らしと  
国際協力の現場を五感で知る

—震災／津波被災地をつなぐ—

武貞 稔彦・吉田 秀美…18

【ドイツ】（ブレーメン・ベルリン）



ドイツにおけるまちづくりと環境

—住民参加、エネルギー、医療—

辻 英史・朝比奈 茂 …20



---

# Field Study Report by Students

2012 / 国内・海外

## Contents

「高校の勉強と大学の学び、その違いは？」

「安心から得る信頼」

「石巻被災地 F S の魅力」

…22

「日本の自然」

「ドイツフィールドスタディ体験記」

「フィールドスタディ ( F S ) の本質」

…23

# 環境と文化の都市・飯田のまちづくり、地域の伝統芸能と社会

安藤 俊次・辻 英史

## 1 学習目的と事前学習

旧城下町である飯田市は、人口約10万人の典型的な地方都市です。ここは人形劇とリンゴ並木を愛し、エコツーリズムを推進する南信州の環境文化都市として有名です。当フィールドスタディでは、人形劇フェスタへの参加を通じ、また、環境重視のまちづくりをめざす飯田市の活動を多方面から学習する事により、新しい地域のあり方を考えます。さらに伝統的な工芸体験をしたり、周辺の妻籠および馬籠地域の伝統的街並みを視察したりして、文化の伝承とまちおこしを体験的に学習します。

事前学習では、飯田の地理、歴史、文化を踏まえ、飯田市が環境文化都市としてどのような活動を行っているかを一通り学習します。

## 2 行程（移動は貸切バスです）

第1日 朝、大学正門前から貸切バスにて飯田へ。午後、町中（道路も）が人形劇その他の舞台となる人形劇フェスタを見学。夕～夜、りんごん踊りに参加。地元チームに混じって、通りを練り踊りました。擦れ違う他のチームと思わぬ交流も生まれます。休憩時の花火は、興奮を更に高めてくれます。夜は、砂払温泉で疲れを取ります。

第2日 午前、飯田市長の講義「文化経済自立都市への挑戦」を受講。質疑応答。市長自らの体験を踏まえた講義は説得力に富んでいました。昼食、かぶちゃん食堂で地域の食材による料理を味わいます。午後、地域の伝統芸能、今田人形座による人形浄瑠璃を鑑賞、アメリカ、ミズーリ大学の学生による公演も好評でした。天竜峡見学後、飯田に戻り地域産業の水引工芸館を見学。市内自由散策。

第3日 午前、いいだ人形劇フェスタ実行委員会委員長の講義「いいだ人形劇フェスタについて」を受講。市民による運営（苦勞、失敗、成功）について学びました。質疑応答。ひさかた風土舎代表長谷氏の講義「地域自治と公民館活動」を受講。自治について学びました。質疑応答。午後、飯田市産業経済部産業支援課の講義「産業 経済自立度向上に向けた取組」を受講。地域の経済自立について学びました。質疑応答。遠山郷へ移動、途中、廃校になった小学校見学。夕食、遠山郷にて地域の産物を中心とした夕食を味わい、その後交流懇親会。

第4日 午前、遠山郷和田地区にて昭和の街並みなどを見学後、妻籠、馬籠に移動し、保存された中山道の宿場町の街並みを歩く。夜、東京着。

## 3 事後学習

各自が関心を抱いたテーマで、レポートを作成し、口頭でも発表します。

### ■参考文献（事前学習等で勉強するテキスト）

小島聡・西城戸誠編『フィールドから考える地域環境』

ミネルヴァ書房。その他プリント各種。

### ■基本情報【2012年度実績】

日程	2012年8月4日～7日
費用	39,000円程度（宿泊費、食費代、往復及び現地交通費、保険料等を含む）
参加人数	23人



りんごん踊りに参加

## 1 フィールドスタディの内容

このフィールドスタディでは、富士山周辺や草津、伊豆地方における自然と陸水環境、および浅間山の火山活動の歴史などを実地に学ぶことを目的にした。

より具体的には、富士山周辺における湖沼群の湧水機構および水温・水質の実地観測をおこない、また、中伊豆地方のワサビ田の歴史を知り、日本一の規模を誇る群馬県嬭恋村の広大なキャベツ畑を見学するなかで、それが伊豆地方や嬭恋村の自然や水質環境とどう関連するのか等について学んだ。さらに、浅間山の火山活動、とくに1783年の天明の大噴火がもたらした甚大な被害についても学んだ。

## 2 事前学習

事前学習では、このフィールドスタディ用に作成された資料に基づいて、どこで何を学ぶのか、学習のポイントは何か等について概略的な説明をおこない、興味がある学生はさらに自学自習できるようにした。また、最終的な課題としてレポートの作成・提出を指示した。

さらに、水質観測等このフィールドスタディの活動全体が屋外でおこなわれるため、雨天に備え服装や持ち物についても注意した。

## 3 日程

このフィールドスタディは、中1日を置いて1泊2日を2回くり返す形で実施した。宿泊がある日の夜は、夕食後、その日の学習内容を確認するとともに、その日までにおこなわれた観測等の学習が、翌日以降の学習にどうつながるのか、ポイントは何か等について整理、確認した。

前半では、富士山周辺の湖沼群の湧水機構について学んだ。第1日目は、富士五湖の1つ、精進湖で水質観測をおこなった。次に、富士宮市にある白糸の滝を訪ね、そこでも水質観測をおこなった。さらに柿田川湧水公園でも水質観測をおこない、周辺地域の陸水環境について学ぶとともに、富士山の噴火の歴史やそれに影響されてできた地形・地層との関連性についても学んだ。続いて2日目は、静岡県立農業試験場ワサビ分場を訪ね、日本最大のワサビ生産地である中伊豆地方のワサビ田の歴史および現状について講義を聞いた。さらに、

その近くにある浄連の滝では、小規模のワサビ田を見学するとともに、ここでも周辺の水質観測をおこなった。その後、函南町田代盆地にある丹那断層に移動した。丹那断層は1930年の北伊豆地震でできたもので、国の天然記念物に指定されている。これを見ながら、巨大地震によって地層がどのように動き、断層が形成されるのか等について学んだ。東京への帰路、芦ノ湖でも水質観測をおこなった。

日程の後半3日目には、草津にある品木ダムを訪ね、水質調査をおこなった。品木ダムに流れる湯川の水は強度の酸性であるため、川の水は飲料水としてはもちろんのこと、農業用水としても利用できない。そこで、この強度の酸性水を中和する事業が国によっておこなわれている。それをおこなっているのが国交省品木ダム水質管理所であり、そこで中和事業の歴史や実情、今後の課題などについて学んだ。

日程の最後、4日目には群馬県嬭恋村JAで、嬭恋村におけるキャベツ栽培の歴史や現状についてJAの担当者から話を聞き、周辺にある広大なキャベツ畑を見学した。その後嬭恋郷土資料館を訪ね、天明年間に起こった浅間山の火山災害（鎌原火砕流）の歴史を学んだ。東京への帰路、最後の訪問地、浅間火山博物館を訪ね、浅間山の火山活動およびそれが周辺の自然環境や地質、水質などに与えた影響を学んで全行程を終えた。

## 4 事後学習

4日間で学んだ富士山や伊豆地方の周辺地域における陸水環境や火山活動などについて改めて整理した。課題となっているレポートを回収するとともに、最小限の理解度を確認するため小テストをおこない、フィールドスタディの全行程を終了した。

### ■基本情報【2012年度実績】

日 程	A: 2012年9月3日～4日 B: 2012年9月6日～7日
費 用	約40,000円（宿泊費、昼食代、全交通費、見 学料、保険等を含む）
参加人数	21人

## 1 フィールドスタディの内容

このフィールドスタディは知的障害者が地域で生活するために行う作業や活動に学生が参加して地域での障害者福祉活動を理解し、学生自身が地域で何ができるのかをフィールドで考え実感してもらうことを目的に夏季休暇期間に実施しているプログラムです。

フィールドの現場は埼玉県三郷市の社会福祉法人で、障害者が行う軽作業、昼食準備・パン製作、廃品回収、散歩、パン販売（市役所等訪問、地域での販売）など、社会福祉法人が実施している活動全般に参加し、就労支援や生活介護などの実態を体験します。参加学生の多くは障害者と活動をともにするのが初めての学生ですが、4日間の実習を行うことにより、どのような課題などがあるのかの一端に気付いたりします。プログラムを立ち上げた当初は知的障害者の看護実習という名称で募集を行っていましたが、教えられるのは私たちの方であり、私たちが実際にできるのは障害者と一緒になって同じときを過ごすことだとみんなで感じ、今のプログラム名になっています。

プログラム参加の記録は、各学生が参加日毎にフィールドノートを作成し、施設の方のコメントや助言を得る形でまとめています。

## 2 実習内容

夏季休暇期間の事前にきめられた4日間、施設を訪問することが活動の中心です。施設側の活動は大きく分けて①生活介護（程度の差により2つの施設がある）、②就労活動（パン製作、厨房での食事提供、地域生活支援センターでの軽作業・内職活動）の2つの活動に大別されますが、5つの場所別活動に対して1日1場所のかたちで参加することが基本となっています。

施設側の学生収容能力に限度があるため、事前にどのような活動に参加するかを調整し、グループ化し、学生がいろいろな活動を体験できるように配慮しています。1日の活動は、朝8時からの職員打ち合わせから午後3時までの介護・就労活動に参加した後、当日のフィールドノートのまとめを行い、担当職員からコメントをもらうことで終わるという日程です。職員の方との自由な意見交換も行われます。

## 3 事前・事後の学習内容

事前学習として、6月に施設側の職員の方を交えてイントロダクションの授業を行っています。そこでは施設の紹介、活動内容の紹介、施設での注意事項などについての説明を施設側から受けたのち、質疑応答が行われます。障害者施設への訪問が初めての学生も多いため、丁寧な説明が行われます。学生からは、どのような問題意識を持って参加するのかなどが発表されます。

事後学習としては、10月に施設側の職員にも参加をえて、事後授業が行われます。事後学習の目的は2つあります。1つ目は8月の実習とその際作成されたフィールドノートをもとに、学生側から事後報告を行うこと。実際に現場の活動に参加しての感想や施設側へのコメントなどが発表されます。2つ目は全般を見渡しての思いつき・回想（reflections）を発表してもらいます。『障害のある人もない人も共に快適な社会環境』（以前の施設職員の方の言葉）を考える機会として、例えば自分の周りにどのような障害者施設があるのか、障害者自立支援法の影響などいろいろな関連事項をまとめる作業を行った結果をこの場で発表します。このような取り組みを行うことで、自分の周りの地域での社会貢献などの意識に繋げてもらうことを期待しています。

このような結果は最後に報告書の形でとりまとめが行われます。

### ■参考文献

とくにありません。

### ■基本情報【2012年度実績】

日程	2012年7月30日～8月24日のうち4日間
費用	3,000円（昼食代（500円程度/日）4日分を含む）および交通費を自己負担する。
参加人数	10人

# 多摩川138kmをたどる!源流域から河口までの流域圏と持続可能な地域社会

小島 聡・朝比奈 茂

## 1 フィールドスタディの内容

2011年の東日本大震災は、都市と過疎地域の関係性を再認識する機会になった。もっとも、これまであまり意識されてこなかったが、実は、1級河川の流域圏には源流域の山村から河口の大都市まで、多様な地域社会が存在している。この事実を目を向け、源流の山村と下流の都市が共存し、流域圏全体が持続可能であるための課題と実践について考えることが、このコースの目的であった。このコースで訪れた多摩川は138kmというコンパクトな1級河川で、過疎の村、首都圏の郊外都市や大都市が流域圏を構成しており、それぞれの地域の持続可能性の違いや地域間の関係性を理解しやすいフィールドといえる。

## 2 行程

セクション1は、「源流域の持続可能な小菅村をめざして」をテーマとして、源流域の山梨県小菅村を1泊2日で訪れた。地域の環境・経済・社会の現状と課題、そして地域振興政策について、多くの関係者に話を聞き、村をまるごと理解することを試みた。小菅村の住民との交流もあり、山の急斜面を利用したこんにゃく畑を経営する農家では、試食をさせてもらいながら、特産物のこんにゃくに対する想いを聞くことができた。また山村の移り変わり子どもたちについて、小学校の元校長に語り部になってもらった。

セクション2は、「東京郊外の清流のまちのフィールドミュージアム」をテーマとして、中流域の東京日野市を日帰りで訪れた。多摩川と浅川に囲まれた東京の郊外都市である日野市に残された用水路、斜面緑地、農業公園、学校ビオトープなどの2次的自然全体を地域まるごと博物館と見立てて着地型観光を行い、その後、ワールドカフェ方式のワークショップで、地域環境資源を活かしたフィールドミュージアムの育て方について議論した。

セクション3は、「多摩川的环境再生と現在」、「川崎市の多摩川プランとまちづくり」、「多摩川における市民活動と環境教育」をテーマとして、下流域の川崎市を訪れた。国土交通省京浜河川事務所から、多摩川の戦後史と現代について、環境汚染と環境保全を軸にして講義を受け、さらに、NPOによる市民活動の講義、川崎市による多摩川を活用した自治体政策の現状と課題に関する講義を受け河口干潟付近では環

境教育を体験した。最後に、羽田空港が見える河口で、小菅村からはじまった多摩川流域の旅について総括し、事後講義では、地域間の協力の可能性について展望した。参加者の多くは流域をたどることはじめて発見したことを語っていた。源流の小菅村、中流の日野市、下流の川崎市をそれぞれ訪れたことが仮にこれまでであったとしても、短期間の間に、流域圏、そして持続可能性という視点で、それぞれの地域の存在を体感を伴って思考の中で重ね、地域間の関係性にまで意識を向けることによって、今まで見えなかったものが見えるようになったのではないかと。さらにいえば、多摩川の流域圏のNPOをはじめとする多くの人々も実はこうした経験はあまりなく、そこでこのコースから、人間環境学部のFSをこえた持続可能な発展に関する教育(ESD)の社会実践としての可能性を見いだすこともできるだろう。

### ■基本情報【2012年度実績】

日 程	2012年8月16日～17日、24日、28日
費 用	15,000円程度(小菅村での宿泊費、昼食費、バスチャーター費、資料費等) ※各日程の自宅と最寄の駅間の交通費、24日と28日の昼食などはのぞく。
参加人数	19人



ゴールは潮風が気持ちいい川崎の河口付近

## 1 フィールドスタディの内容

現在の東京は、徳川家康の江戸の街作り、明暦の大火後の川向こうへの拡大、明治の地区改正、大正の関東大震災、戦後の焼け野原からの復興を経て形作られた。これらを念頭において、このフィールドスタディでは東京の街歩きを通じて、江戸と東京の歴史的遺産及び文化的遺産、環境に関する資料館、都市の緑、都市公園施設等を訪ねる。そして、東京の成り立ちと都市造りに際して環境と防災の視点が重要であることを学習するとともに、今後の都市環境、都市景観、都市の緑を考えることが目的である。

## 2 行程

①第一日目は、地下鉄虎ノ門駅に集合し、昭和初期の官庁計画による旧文部省ビルで旧大臣室などを見学し、国会議事堂を正面からながめ、憲政記念館で関連資料を見学した後、明治の官庁集中計画による旧法務省庁舎（重文）の中の法務資料展示室を見学した。昼食の後、日比谷公園で日比谷公会堂・資料館などを見ながら公園を散策した。

②第二日目は、地下鉄清澄白河駅に集合し、深川江戸資料館で江戸の暮らしを学んだ後、清澄庭園を訪ね、大名屋敷から富豪の邸宅を経て、現在は都市の緑の拠点となる歴史を学ぶ。パン工場での昼食の後、隅田川に沿って散策、気象緩和など都市における川の働きを考えながら、清洲橋などの景観を楽しむ。終わりに明暦の大火に関係する回向院を訪ねた。

③第三日目は、JR上野駅に集合し、上野公園から不忍池へ経て、旧岩崎庭園でコンドル設計の明治時代の洋館建築を見学する。東大構内を散策し、昭和初期の校舎建築をみるとともに昼食をとる。菊坂で一葉、啄木等の足跡を訪ね、水道歴史館で江戸から現在にいたる水道を学び、終わりに震災小公園元町公園を訪ねた。

④第四日目は、JR王子駅に集合し、飛鳥山公園を歩き、渋沢資料館で渋沢栄一の足跡を学び、旧古河庭園で和洋の調和した庭園を散策する。昼食の後、染井の里、染井墓地、慈眼寺などを経て、西ヶ原ふれあい公園（東京外国語大学跡地）で防災と環境を考慮した最新の都市公園を散策する。終わりに旧中山道があるき、とげ抜き地藏をへて巣鴨駅で解散した。

### ■参考資料

事前講義の際に、関連のビデオにより、江戸の街作り、ヒートアイランドと水辺環境、後藤新平の業績などを紹介し、関連書籍を事前に学習する。

### ■基本情報【2012年度実績】

日程	2012年9月4日、6日、11日、13日
費用	有料施設入園料約2,000円と昼食費、交通費
参加人数	13人



清澄庭園にて

# ブナの森から農業と農村を考える

田中 勉

## 1 目的

農業は自然環境を利用して成り立つ産業です。天候など人間の力ではいかんともし難い条件に左右される産業でもあります。環境に大きく制約されると同時に環境を改変していると言っていいでしょう。

吉川区（旧吉川町）でのフィールドスタディが目的とするのは、農業と農村についてよく見て考えることです。日本の農業は衰退が指摘されて久しく、農村は過疎と高齢化そして後継者難に苦しんでいると言われていています。それは本当だろうか？自分の目で確かめてみよう。徹底的に見る・聞くことをめざします。

本フィールドスタディは、上越市と法政大学の「相互交流協定」に基づく公式行事として、多くの関係者の協力によって運営されています。吉川の人との「出会い」を楽しみ、そこから多くのことを学びます。

## 2 事前学習

事前に基本的な情報を得て、現地で何を見るか・何を尋ねるか、を明確にするため準備をします。①日本の農業の現状、②吉川区概要、③食料・農業・農村基本法、④中山間地域等直接支払制度、⑤農地・水保全管理支払交付金制度、⑥農業法人による集落営農、などについて文献・資料を用いて学びます。また、「質問したいこと・知りたいこと」の項目づくりグループワークを行います。

## 3 行程

### 1日目

昼までに宿泊場所（全日程ここに滞在します）に集合、昼食後、「開講式・オリエンテーション」からスタート。まず、吉川区と農業の現況について吉川区総合事務所から説明を受け、「上越市の農業政策」に関する講義、その後、「田んぼの学校」（水辺のピオトープ）を見学、ブナ林の中を歩きました。

### 2日目

この日のテーマは「水の流れをたどる旅」。マイクロバスで区内を山から日本海近くまで移動しました。地元人々に親しみをこめて「尾神さん」と呼ばれる尾神岳のブナの森を抜けて吉川の流に沿って下り、途中、田んぼへ水を引くための「堰」や「用水路」を見学、水利用と集落形成の関係について学びました。

午後は、川からの用水確保が難しい農地に築かれた「溜池」と、その水を利用するための施設である「ファームポンド」や「揚水機場」を見学しました。

帰る途中、ブナの森の湧水に立ち寄り、冷たくおいしい湧き水でのどを潤しました。

夕食は地元関係者との交流会。お世話になる方々とバーベキューをしながら楽しく語らった後、満天の星空の下での花火大会で大いに盛り上がりました。

### 3日目

この日のテーマは「集落農業と棚田」。

午前中は、平地の大規模圃場で集落営農を行っている「竹直生産組合」を訪問、個別農家でなく集落で農業を行う背景・現状・今後の展望について説明を受けました。また、農機具や「田んぼのベンツ」とよばれるコンバインなどの農業機械、収穫した米を乾燥保存する施設や味噌工場の見学も行いました。

午後は、「カントリーエレベーター」を見学、さらに区内の酒蔵「杜氏の郷」を訪問、吉川産の材料で作られたジェラートが好評でした。

その後、山間部にある川谷地区へ移動、山間地の農業に。農家の方を囲んで棚田での農業について話しをうかがい、質疑応答の後、棚田の見学をしました。条件不利地域と言われる山間地農業の現実を見聞することで理解を深めることができました。

ダイコンの種まき体験もしました。短時間ですが鋤を持って農作業をします。11月にはダイコンの収穫とブナ紅葉を見るツアーも行いました。

### 4日目

午前中は、3日間の学習を通して疑問に思ったこと、尋ねてみたいことについて「まとめの質問会」を開催、総合事務所や農家の方に答えていただき理解を深め、昼食後に解散、帰途につきました。

## 4 事後学習

後期開始時に事後学習を行い、参加者各自がフィールドスタディで考えたことを発表し合い、まとめの学習を行いました。

### 参考文献・参考資料

- ・原剛,1994,「日本の農業」岩波新書・生原寺眞一,2009,「よくわかる食と農のはなし」家の光協会
- ・長谷川・重岡・荒穂,2004,「農村ふるさとの再生」日本経済評論社
- ・柗湯・松村編,2002,「食・農・からだの社会学」シリーズ環境社会学5、新曜社

### 基本情報【2012年度実績】

日程	2012年8月19日～22日
費用	約25,000円（宿泊代、農家への謝礼、マイクロバス実費、旅行保険料などを含む）
参加人数	15人



用水路で説明を受ける

## 1 フィールドスタディの内容

他のフィールドスタディとはちがって、「科学博物館で学ぶ」では、グループ学習ではなく、あくまで原則個人参加であり、各自がそれぞれの博物館でどのような企画・セミナーが計画されているかを調べ、参加するイベントを決定し、大学外の現場で環境問題等を学習することを目的とする。以下は代表的な志望動機の一節である。

「グループ作業ではなく、個人でテーマを決定し、自ら足を運び研究するという機会が今までになかったので、とても良い機会だと思い今回挑戦してみたいと思いました。科学技術や自然環境に関しては大学に入り色々と学んできましたが、話を聞くだけでそれを実際に見るということはなかったため、教室では学ぶことのできない実物をこの機会に見てみたいと思ったからです。」

## 2 実施の具体例

1つのテーマが4時間以上のものを1日分の学習として認め、それ以下のものを半日分として、合計4日分の学習をすることを義務づけている。

Uさんの場合

8月4日、11日 千葉県立中央博物館

学習テーマ「化石の模型を作ろう」

学習の目的「実際に化石の模型作りを体験することでアンモナイト、三葉虫などの化石に興味、関心を高め、理解を深める。

また、形態的な特徴からアンモナイトや三葉虫がどのように生きていたのか、どんな生き物だったのか生態を詳しく知る。

さらに、地質年代を決定する指標となる示準化石を題材にすることにより、地球環境の歴史や変遷を捉える。」

8月18日 観音崎自然博物館

学習テーマ「磯の生物観察会」

学習の目的「なかなか目に触れることのない磯の生物に実際に触れて観察し生態を調べる。」

8月26日 国立科学博物館筑波実験植物園

学習テーマ「植物観察と植物画を描く」

学習の目的「希少植物や特別に観覧できる植物の解説を聞き、植物学的観察に役立て植物画を描く。」

8月30日 茨城県自然博物館

学習テーマ「化石のクリーニング」

学習の目的「化石の講義を受ける。岩を割って歯の化石を取り出す工程を学び、化石の年代と歯の種類を調べる。貝などの化石発掘を体験する。」

9月7日 国立科学博物館

学習テーマ「夜の天体観望公開」

学習の目的「自宅の望遠鏡では見ることができない二重星、星団、星雲を観望し、天体の知識を深める。」

### ■ 基本情報【2012年度実績】

日 程	夏季休暇中日帰り4日間
費 用	企画によって受講料が必要なものもあるが、原則的には実施場所までの交通費、入館料、食事代が主な費用となる。
参加人数	14人



教室風景



Uさんの植物画

# 自然エネルギー・自然保護と地域社会の再生

西城戸 誠・板橋 美也

## 1 フィールドスタディの内容

このフィールドスタディでは、青森県鱈ヶ沢町において、一般市民が風力発電事業に出資を行った「市民風車」や、リンゴ農家から廃棄物として出される「剪定枝」から作られた薪や木質チップが町内の福祉施設のボイラーの燃料や畑作の肥料として再利用される様子などを見学することで、再生可能エネルギーの地域社会への普及について学びました。また、白神山地（ミニ白神）を訪れて人々の生業と白神山地との関係を学ぶ一方、鱈ヶ沢町内での様々な地域活動（グリーンツーリズム、かかしによる地域活性化）やそれを支援するNPOへの理解を深め、再生可能エネルギー・自然保護と地域社会の再生がどのように連関しているのか、していくべきかを考えました。

## 2 行程

1日目は、最初に、白神山地の世界遺産登録と時を同じくして発足したミネラルウォーターの会社を訪問し、白神山地の水の商品化と流通について学びました。また、売り上げの一部によって運営されているNPO法人白神共生機構についてもお話を伺いました。次に、リンゴの剪定枝を使った木質チップ工場を見学し、リンゴ農家で農作業体験をしながら、この地域の農業と再生可能エネルギーの循環の現状と可能性について学びました。

2日目は、午前中に鱈ヶ沢町役場を訪問して町の概要のレクチャーを受け、過疎地域の現状と課せられた課題について学びました。さらに、「わさお」（ブサカワで有名な秋田犬）のプロデュースを手がける方のお話も伺いました。その後、農家民宿「せっちゃんのエキスペリヤンスの家」で、鱈ヶ沢の食文化を体感しました。午後は、「せせらぎ中村委員会」という中村地区のまちおこし団体のもとで、地域活動として展開されているかかしづくりを行いました。

3日目は、午前中に白神山地（ミニ白神）を訪問し、白神山地の自然に触れながら、世界遺産・白神山地と地域住民の生活との関わりについて学びました。そして、マタギの方が経営されている熊ノ湯温泉で赤石川の鮎の昼食をいただいた後、市民風車「わんず」の立地点で、NPO法人グリーンエネルギー青森の方から市民風車の設立経緯のレクチャーを受け、風車の中を見学しました。その後、鱈ヶ沢町内の特別養

護老人ホーム「つくし荘」で、風力発電、太陽光発電、チップボイラーの見学も行い、地域でエネルギーを生産し、消費している現場の実態と今後の課題を学びました。夜はこの3日間でお世話になった方々との交流会を行いました。

第4日目は、鱈ヶ沢町から青森市へ向かう途中に、津軽金山焼での陶芸体験をし、津軽鉄道サポーターズクラブの方のお話を伺いました。5日目はオプションツアーとして、奥津軽の着地方観光のモデルコースをたどる旅となりました。このフィールドスタディでは、さまざまな人、活動に出会います。それぞれを単体でみると断片的に見えますが、再生可能エネルギー、自然保護、地域活動が、さまざまな形で関連し、それが有機的に結ばれるときに—それは簡単なことではありませんが—、過疎地域の再生の可能性が見えてくるのです。

### ■参考文献（事前学習で勉強するテキスト）

小島聡・西城戸誠編『フィールドから考える地域環境』ミネルヴァ書房  
鬼頭秀一、『自然保護を問いなおす』ちくま新書 ほか

### ■基本情報【2012年度実績】

日 程	2012年8月27日～30日、OP8月31日
費 用	約42,000円（現地までの交通費は含まない） OPツアーの参加者は約51,000円
参加人数	19人



中村地区でのぞうりづくり

# 生業を中心とした地域社会のレジリエンス形成

西城戸 誠・辻 英史

## 1 フィールドスタディの内容

2011.3.11の東日本大震災によって、法政大学の多くの教職員、学生が直接・間接に影響を受けました。メディアなどで伝えられる被災地のありようを見て、何とかしなければならぬ、何か助けになることをしたいと考え、個人的に被災地でのボランティアを経験した方もいるかと思えます。

法政大学人間環境学部では、宮城県石巻市において、NPO法人PARCICと提携し、2011年から震災ボランティアを実施しています。2012年度は、生業を中心とした地域社会のレジリエンス形成というテーマを掲げ、石巻市北上町の生業や、日常生活への支援活動を通じて、震災に対するレジリエンス（回復力）を考えていくことを目的としています。

## 2 行程

事前学習は2回実施しました。まず、このフィールドスタディの受け入れ組織である、NPO法人パルシックの西村陽子さんから、石巻市北上町の概況や、震災支援の現状と課題について講義をしていただきました。このフィールドスタディの参加者の定員は各4名と少ないのですが、これは現地に宿泊施設がなく、ボランティアの受け入れも困難であるためです。

また、必要とされるボランティアの内容も、状況によって変化するため、現地での活動は臨機応変に行う必要があることを参加者は確認しました。また、公共政策研究科の講義（環境社会論）に部分的に参加し、石巻市北上町で地域の生業に関する調査研究を行っている、立教大学の黒田暁先生の講義を聞き、現地への理解を深めました。

フィールドスタディは、8月4日から10日、8月19日から25日の2回実施いたしました。このフィールドスタディは教員が引率をして各地をまわるのではなく、受け入れ団体であるNPO法人パルシックのもとで、さまざまな活動を行いながら、現地の方からさまざまな話を伺います。例えば、仮設住宅近くの畑で作物の収穫のお手伝いや、仮設住宅の集会場では子どもたちへの学習支援活動も行いました。さらに、仮設住宅での夏祭りの手伝いや、十三浜・相川地区でのイベントの手伝いなども行いました。このような地域の生業、生活に関わるボランティア活動を行いながら、震災復興

とは何か、ボランティアをする／されることの意味と意義、震災に対する地域のレジリエンス（回復力）とは何かなど、多くの論点を参加者は、自ら感じ、獲得していきました。

フィールドスタディの最後に担当教員が石巻市北上町に訪問し、ふりかえりの会を実施しました。事後学習としてレポートの提出がありましたが、一部の内容は人間環境学部のホームページに掲載されていますので、是非、ご覧ください。

<http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shinsai/2012/volunteer.html>

### ■参考文献（事前学習で勉強するテキスト）

小島聡・西城戸誠編『フィールドから考える地域環境』ミネルヴァ書房

黒田暁，2009，「生業と半栽培——河口域のヨシ原は何によって維持されてきたか」宮内泰介編『半栽培の環境社会学』昭和堂

黒田暁，2010，「半栽培から引き出される地域資源管理の持続性——宮城県北上川河口地域に広がるヨシ原を事例として」『サステナビリティ研究』創刊号：163-177

### ■基本情報【2012年度実績】

日 程	2012年8月
費 用	¥15,000（往復の交通費を除く）
参加人数	8人



農園で作った野菜の販売の手伝い

# 歴史的環境の保全を考える

根崎 光男

## 1 本フィールドスタディの目的

「歴史的環境」とは、先人の営みが刻まれた景観、遺跡・遺物、伝統的建物群、踊りや祭りのような伝統芸能などをも含む総称である。しかし、それらは現代社会の利便性や効率、そして開発の論理によって解体の危機に瀕している。

そこで、今年度のフィールドスタディでは、1つは埼玉県さいたま市内に残る見沼たんぼ—江戸時代の新田開発によって出来あがったたんぼ—の景観にかかわる斜面林や見沼代用水、見沼通船堀の保全に取り組む地域 NPO 法人の活動の見学や聞き取りを通して、その保全についての課題などを学んだ。2つめは神奈川県箱根町と静岡県三島市を結ぶ旧東海道にある石畳・一里塚・杉並木の保全状況や復元された箱根関所などの現場を見学し、自治体の取り組みなどを学んだ。

古きものを残しながらさらに新たな息吹を与え、歴史資源や観光資源としてまちづくりに生かそうとする、地域の人々の保全活動を通して歴史的環境保全の意義や課題を考えた。

## 2 行程

第1日目は、さいたま新都心駅から見沼地域ガイドクラブ会員の案内で、高沼用水、見沼代用水西縁、浦和西高校の斜面林、芝川、見沼見聞館・ビオトープを見学した。そして見沼たんぼの歴史や保全活動についての講義を受けた。現在の見沼たんぼには、昔ながらの広大な緑の稲穂がたなびく田園地帯と、畑や産業廃棄物の処理場と化した一帯とがあり、その光と影の現実を見ることで保全のありようを考えるのいい機会となった。

第2日目は、箱根湯本駅から電車やバスを乗り継ぎ、公時祭りが行なわれる公時神社、全国の湿地や高山の植物が集められた箱根湿性花園、観光地として名高い早雲山、桃源台、芦ノ湖、元箱根を見学し、歴史や自然の観光資源を活用したまちづくりについて学んだ。

第3日目は、宿からバスを利用して、江戸時代の東海道の面影を残す旧街道石畳・甘酒茶屋や復元された箱根関所、そして老木となった杉並木、またこの東海道の延長線上にある静岡県三島市側の整備された石畳や山中城跡・山中一里塚を見学し、引率教員がその歴史や保全上の問題を説明しながら、保全の意味について考えた。

第4日目は、三島市民文化会館において、三島市教育委員

会の学芸員から「歴史的環境保全の現状と課題」と題した講義を受けた。市役所が遺跡の保全に予算を投じるには市民の理解が不可欠であること、保全にあたっては遺跡の発掘などを通じた基礎調査が前提であることなど、日頃の座学では知りえない情報を参加者全員が共有できた。

今回のフィールドスタディによって、各自治体によって歴史的環境保全の取り組みが違ふこと、また地域の NPO 法人や市民の活動が大きな意味をもっていることなどを体感できたように思う。

### ■ 基本情報【2012 年度実績】

日 程	2012 年 7 月 15 日、9 月 3 日～5 日
費 用	約 20,000 円（宿泊代 2 泊分・施設入館料を含む。交通費は含まない。）
参加人数	23 人



見沼たんぼの斜面林



箱根旧街道の石畳

# サステナビリティ経営とCSRの源流を訪ねる

長谷川 直哉

## 1 フィールドスタディの内容

夏に実施するこのフィールドスタディでは、企業とNPOの協働によるCSRの実践（A日程）とCSR分野で顕著な功績を遺した企業家の歴史を振り返る（B日程）から構成されており、CSRの現在と過去を俯瞰しながらその社会的・思想的背景を学びます。

A日程「企業とNPOが支える有機農業」では、LOHASな住宅リフォームで急成長を遂げる（株）OKUTAの経営理念や事業戦略を学び、同社がCSRの一環として埼玉県小川町で取り組む有機農業支援（CSA：Community Supported Agriculture）の現場を体験します。「企業が成長するほど社会や環境が良くなる」という経営理念の下でビジネスを行う企業とその理念の実践をサポートするNPOの役割を学び、現代社会に生きる企業が行うCSRの意義について考えていきます。

B日程「企業家に学ぶCSR（大原孫三郎とクラレ）」では、法政大学大原社会問題研究所の創設者である大原孫三郎のCSR活動の軌跡に触れます。大原孫三郎は明治～大正期に倉敷紡績、クラレの社長として活躍する傍ら、大原美術館や倉敷中央病院の設立など社会貢献活動を精力的に行いました。利益とCSRを両立させた大原孫三郎の活動を通じて、CSRが欧米から移入されたものではなく、明治期の日本にも存在していたことを再確認します。

## 2 行程

< A日程 > 第1日目午前は、埼玉県小川町のNPO法人生活工房つばさ・游を訪問し、小川町における農商工連携の現状についてのレクチャーを受講します。午後は霜里農場を訪問し有機農業の実践現場を見学するとともに農場主金子美登さんのレクチャーを受講し意見交換を行います。農場見学後は晴雲酒造を訪問し霜里農場で栽培された有機米から醸造された日本酒や甘酒を賞味し小川町に隣接する越生に宿泊します。

第2日目は小川町で栽培された有機大豆を原材料として使用するとうふ工房わたなべを訪問し、渡邊社長のレクチャーを受講し有機とうふやおからドーナツを賞味します。午後は大宮市に移動し（株）OKUTA 山本社長のレクチャーと意見交換を行います。

B日程の第1日目は、東京大手町の（株）クラレ本社を訪問しCSR部中山部長から大原孫三郎の経営理念と同社のCSR活動についてレクチャーを受け、クラレに生きる大原孫三郎の経営理念について学びます。午後は岡山県倉敷市に移動し、倉敷美観地区を見学した後、倉敷紡績工場跡地を利用した倉敷アイビースクエアに宿泊します。第2日目午前には、大原孫三郎が社員のために設立した倉敷中央病院を訪ねてレクチャーを受け、院内を見学します。倉敷中央病院は倉敷市民の医療を担う中核病院として今も重要な役割を果たしています。午後は大原美術館を訪問し学芸課長から美術館の歴史や収蔵品についてレクチャーを受け館内を見学します。大原美術館の存在によって倉敷は第二次世界大戦中も米軍の空襲の対象から外され、多くの市民の命や歴史的景観が守られました。

現代のCSRの源流ともいえる大原孫三郎の社会貢献活動に触れ、創業者の経営理念が100年以上の歴史を持つ企業の発展を支えていくあり様を学びます。AB両日程を通じて、企業活動とCSRの関係について考えていきたいと思えます。

### ■参考文献（事前学習で勉強するテキスト）

パートナーシップ・サポートセンター（2012）『NPO×企業 協働のススメ』サンライズ出版

### ■基本情報【2012年度実績】

日程	A：2012年8月6日～7日 B：2012年8月8日～9日
費用	約60,000円（現地までの交通費、宿泊代）
参加人数	11人



企業と地域が支える有機農場

## 1 内容

人間環境学部での学習は、人間形成と環境政策に大別されます。人間形成では、哲学、文学、芸術、歴史、文化、健康などを学習し、人間とは何かを深く考えます。環境政策では、経済、法律、社会、自然科学などを学習し、地球環境問題の解決策を理解します。

この「障害者福祉の体験」プログラムは、人間理解を深めるために行うもので、人間形成のF Sです。障害者と一緒に合宿し、福祉活動の大変さを実際に体験し、人間としての生き方を実感します。F S開始以来のロングラン・プログラムです。

「障害者福祉の体験」プログラムを主催しているのは、NPO法人「ゆきわりそう」です。ゆきわりそうは、豊島区にある施設において障害者介護を行っています。毎年夏になると、ゆきわりそうの障害者は群馬県松井田の山荘に行って合宿をします。これを「夏の合宿」と呼んでいます。このとき、本学部の学生もこの合宿に参加します。いつも健常者と付き合い合っている学生にとって、短期間ではあるものの障害者と寝食を共にし、大変貴重な経験をします。

## 2 行程・費用

1日目：東京都豊島区の「ゆきわりそう」からバスで出発します。

2・3日目：プログラムにしたがって、山荘で担当する障害者と一緒に行動します。

4日目：バスで東京に戻ります。  
プログラムは、ゴロ野球、体操、絵画、音楽、乗馬、マラソンなどに分かれ、8月中旬に実施されます。学生は、事前講義に出席し、ゆきわりそうと相談の上、どのプログラムに参加するか決めます。プログラムには、2泊3日と3泊4日の2種類があります。障害の程度によってプログラムが分かれるので、事前講義で確かめておきます。費用は、5,000円（交通費、食費などすべてを含む）です。

## 3 注意事項

学生は、必ず、7月中旬に、豊島区のゆきわりそうを訪問し、自分の参加するプログラムを見学しておきます。

## 4 実績

受け入れは10名程度までです。2012年度は、男子3名、女子2名の計5名の参加者がありました。うち1名は障害者介護の経験がありましたが、残りの4名は初めてでした。通常、参加者のうち介護の経験のある学生はあまりいませんが、ゆきわりそうのベテランのスタッフがしっかりとサポートしてくれます。

事前講義と事後講義は、ゆきわりそうの責任者をお願いしています。このため、介護の現場や福祉政策の実際について興味あるお話が聞けます。

## 5 参加した学生の感想（2012年8月）

学生A：このF Sは私にとって「人のために働くということはどうことなのか」を改めて考えることのできるとても良い機会となりました。

学生B：行かなければ理解できない部分が多く、理屈では説明できない良さを感じました。自分自身が障害者の人々に持っていた偏見が取り払われ…、人間としての良さを学べました。

学生C：自分にとってとても良い成長する機会になりました。始めは、参加に不安を感じていたものの、スタッフの方のサポートをかり、担当の子と同じ時を過ごす内に信頼してもらうことが出来…、しっかり目標を持って取り組むことが出来ました。

学生D：相手の事を理解し、私の事を理解してもらって行動を共にすることがどれほど難しいかが、少し見えるようになったと思います。お互いを理解できなくても、理解しようとする「あたりまえであるはずの事」を私は忘れていたように思います。

学生E：これから障害のある方に出会った時に今までとは違う接し方ができる自分がいると思います。

### ■基本情報【2012年度実績】

日程	2012年8月1日～31日のうち4日間（宿泊）
費用	5,000円（食事、交通費などすべてを含む）
参加人数	5人

## 1 フィールドスタディの内容

青森県五所川原市を中心として、奥津軽地方において「津軽鉄道が結ぶまちづくり」というテーマで実施しているこのフィールドスタディは、赤字が続くローカル路線の中でもファンが多いとされる「津軽鉄道」にかかわるさまざまなイベントの実施をサポートする「津軽鉄道サポーターズクラブ」と、奥津軽地方の「着地型観光」を考える研究会のメンバーと一緒に実施しています。従来型の「発地型観光」の一部の内容が、受け入れ側が必ずしも歓迎しないものになったり、観光地に過度に無秩序に観光客が集中して、観光効果を減殺してしまったりする場合がありますが、着地側の受け入れやすい観光を通じて観光地の人々と観光客の間によりコミュニケーションが生まれるような地域密着の観光（＝着地型観光）が必要とされています。このフィールドスタディでは、津軽鉄道沿線に点在する地域住民による活動を見学、体験しながら、奥津軽の「着地型観光」のモデルの一つを、現実を見ながら考え、作り上げていくことがフィールドスタディの目的です。

## 2 行程

第1日目は、雪の中、街歩きをした後、五所川原の夏の風物詩である立佞武多の展示を見学します。その後、「津軽半島を知る・考える」という講義で、津軽鉄道、立佞武多、金山焼の関係者の方の話を伺います。夜は、コミュニティ・カフェ「でる・そーれ」で交流会を開催しました。第2日目は、ストーブ列車に乗車し、太宰治記念館（斜陽館）、新座敷など、奥津軽のさまざまな観光資源を確認したあと、「アートと地域づくり」という講義と津軽塗箸のとき体験を行いました。第3日目は、地元で有名な「スコップ三味線」を体感し、旧小泊村の漁協を訪問、塩辛づくりを体験し、漁師飯をいただきました。午後は、これまで訪問、体験した地域資源を整理した上で、参加学生が「後輩に奥津軽を伝えるためのちらし」を作成しました。第4日目は、廃油を使ったボイラーを用いた冬のアスパラガス農業の現場に訪問し、夏の鱈ヶ沢フィールドスタディの内容と関連づけを行います。なお、フィールドスタディ中の食事は、地元のグリーンツーリズムを行う住民団体や漁協婦人部など、地元地域の女性が「地域の味」を提供してくれます。

津軽鉄道の沿線に存在するさまざまな観光資源、地域の活動が「点」であったものを「線」に変えていく実践を、フィールドスタディの積み重ねから行っていきたいと思っています。

### ■参考文献（事前学習で勉強するテキスト）

小島聡・西城戸誠編『フィールドから考える地域環境』ミネルヴァ書房  
古川彰・松田素二（編著）,2003,『環境と観光の社会学』新曜社ほか

### ■基本情報【2012年度実績】

日 程	2013年2月21日～24日
費 用	約40,000円（現地までの交通費は含まない、20日に深夜バスで現地移動）
参加人数	5人



地元のみなさんの前で発表会



NPOと共同で作成したフィールドスタディのパンフ

# 開発途上国の人々の暮らしと国際協力の現場を五感で知る

—震災／津波被災地をつなぐ—

武貞 稔彦・吉田 秀美

## 1 目的

本フィールドスタディの目的は、経済協力や援助の対象となっている開発途上国とよばれる国や地域—今年度はスリランカの暮らしや人々について、五感を使って知ることです。特に2004年のインド洋津波の被災地の今を見て、日本の被災地のことを考えることを通じて、通常とは異なる角度から日本との関係や日本社会自身のことを見つめなおす機会とします。何らかの形で、日本とスリランカの現実をつなぐことが、大きなテーマでした。またスリランカでは現地大学の学生との交流授業を行い、若い世代同士の「つながり」を持つ機会も設けます。

## 2 事前学習

事前学習は、計5回（主に2限連続で）実施しました。事前学習では、訪問国であるスリランカの概況をはじめ、行程や訪問先に関連した基本事項を学習しました。今回の企画においては、特に、モラトワ大学学生との交流授業に向けた英語のプレゼンテーションのためのグループワークに時間を割きました。大きな発表のテーマとして、東日本大震災後の被災地の今や復興の状況を伝えるということを設定し、グループ毎に自主的な学習をすすめました。また、実際に陸前高田市と特定非営利活動法人 Aid TAKATA のご協力を得て、1泊2日で陸前高田市を訪問し、津波の被害を受けた地に実際に立って感じることを、被災者の方々と短い時間ながらも交流することによって思ったことも、プレゼンテーションの中に盛り込むことを目指しました。

## 3 行程

行程は概略以下のとおりでした。学生たちは毎日一人7枚ずつのA6サイズのカードを渡され、それに見たこと、気づいたこと、感じたことなどを簡単に記すことを求められました。それらのカードは総数で1100枚を数え、帰国後の振り返りや学習に活用されました。

### 1日目

成田空港を午後に出発し、スリランカには夕刻に到着。当日はコロomboのホテルに宿泊。

### 2日目

午前中に国際協力機構（JICA）スリランカ事務所に青所長を訪問し、スリランカに対する日本政府の支援の方向性や、8年前の津波からの復興の状況などのレクチャーを受けました。その後、陸路ゴールに移動。ゴールでは、津波の被害を受けたものの、日本の支援などで復興を遂げた漁港施設

を見学しました。ゴールの海岸沿いのホテルに宿泊。

### 3日目

朝からゴールから東の海岸沿いにある、レカワというラグーン（礁湖）を訪問、生態系の変遷と周辺の漁民に対する復興支援について学びました。津波被害後に漁民の生活再建に携わってきた国際NGOのプラクティカル・アクションと、ルフワ大学の先生の講義を受け、その後、近隣の漁民にインタビューを行いました。

### 4日目

朝ゴールを出発し、コロombo近郊のモラトワ大学で学生との交流事業に臨みました。冒頭モラトワ大学学生によるアイスブレイクを経て、モラトワ大学の学生によるプレゼンテーション、法政大学学生による一連のプレゼンテーションを実施。昼食や午後のお茶の時間を通じて活発な交流が行われました。午後遅くには、別れを惜しみつつ、次の目的地である内陸のキャンディに向かい、ゴールを出発しました。キャンディには夜到着。

### 5日目

キャンディを出発し、朝からヌワラエリヤ地区の紅茶プランテーション（紅茶農園）の見学に行きました。日本にも多くの紅茶を輸出するスリランカと、それを消費するわたしたちとの間にどういう関係があり、現地の人々はどういう風に働いているのか垣間みることができました。午後遅くに現地を出発し、キャンディに戻りました。

### 6日目

朝から陸路、世界遺産であるシギリヤロックの見学に向かいました。現地では、日本の支援によって整備された博物館を見学すると同時に、シギリヤロックの頂上にのぼり、権力者の孤独や歴史に思いを馳せました。

### 7日目

午前中は敬虔な仏教徒である多くのスリランカ人にとって、大事な信仰の場となっている仏歯寺を見学しました。人々の真剣な祈りの様子を見ることができました。その後、キャンディを出発、帰途に象の孤児院を訪問し、象の水浴びを間近に見学しました。その後、ふたたび陸路コロomboに戻りました。

### 8日目

夜のコロombo出発まで自由行動としました。各自思い思いの地区を訪問しました。夕刻にホテルを出発し、コロombo空港から成田空港に向かい出発しました。

## 9日目

正午前に成田に到着、空港にて解散しました。

## 4 事後学習

事後学習では、一般にも公開で行われる事後報告会の準備が主たる目的でした。訪問先にしたがって、グループ分けされた学生たちは、各自の報告に向けて正規の時間外にも集まって議論を重ねたようです。また、大きなテーマである、「被災地をつなぐ」という点については、何をどうすればつながるのか、つなぐということになるのか、について、参加学生のあいだで非常に活発な議論が行われると同時に、参加学生それぞれに悩み考える時間を過ごしたようです。結果として等身大の思いを報告会で披露することができました。一方、帰国後にメンバーが被災地支援の団体を立ち上げた在日スリランカ人と出会ったことから、この縁を基に、FS だけで終わりではない今後のつながりを模索することが学生たちによって行われています。その結果、外部の人々にも情報発信しつつ、被災地のつながりを考えていくフォーラムとして、Facebook 上でコミュニティサイトが立ち上がりました。また、その後の議論を経て、陸前高田にスリランカ人と一緒に2回目の訪問を行い、あらためて被災された方々との交流を行いました。事後報告書の発行だけに留まらず、今後も何らかの形で学生たちが自分にできるつながりを模索し続けることが期待されます。

### ■参考文献・参考資料

樋口まち子 (2006 年) 『もうひとつの島国・スリランカー内戦に隠れた文化と暮らし』(ぶなのもり)

庄野護 (1996 年) 『スリランカ学の冒険』(南船北馬舎)

澁谷利雄 (2010 年) 『スリランカ現代誌—揺れる紛争、融和する暮らしと文化』(彩流社)

東浩紀 (2011 年) 『震災でぼくたちはばらばらになってしまった』『思想地図 beta vol. 2 震災以降』所収 (合同会社コンテクチュアズ)

鷲田清一 (2012 年) 『<隔たり>は増幅するばかり』鷲田清一／赤坂憲雄『東北の震災と想像力 われわれは何をかわされたのか』所収

戸羽太 (2011 年) 『被災地の本当の話をしよう—陸前高田市市長が綴るあの日とこれから』(ワニブックス PLUS 新書)

### ■基本情報【2012 年度実績】

日 程	2012 年 9 月 2 日～ 10 日
費 用	・ 約 220,000 円 (航空運賃、宿泊費、現地交通費などを含む。但し、今後の行程に応じて若干の変動の可能性があります) ・ 海外 FS 奨励金適用有り (詳細は事前説明会にて説明予定) ・ 上記に追加で陸前高田訪問費用約 1 万円がかかります。
参加人数	26 人



ヌワラエリア地区の紅茶プランテーションにて



2004 年のインド洋大津波で被災した漁港で JICA 職員の説明を聞く



モラトワ大学の学生たちと交流

# ドイツにおけるまちづくりと環境—住民参加、エネルギー、医療—

辻 英史・朝比奈 茂

## 1 FSの目標とねらい

ヨーロッパのほぼ中心に位置するドイツは、EUの旗振り役として外交や経済において存在感を見せているだけでなく、歴史ある美しい町並みや芸術・文化の国として有名です。その一方で、ゴミ分別やデポジット制など環境に配慮した生活スタイルを作り出していることでも知られており、とくに再生可能エネルギー利用の推進や脱原発といったエネルギー政策は、日本でもマスコミを通じて紹介される機会が増えました。さらに、日本と並んで少子高齢化が進む国として、社会福祉や医療の領域でも参考になる点は少なくありません。

本FSでは、こうしたまちづくりや環境問題、医療に関するドイツの取り組みの最先端を、約1週間にわたりさまざまな角度から体験することを目標にしました。歴史的に地方分権の国であるドイツでは、現代でも地域ごとにはっきりした個性の違いがあることが特徴です。今回はヨーロッパ有数の大都市である首都ベルリンと北ドイツの伝統ある自治都市ブレーメンの二箇所を訪問することで、それぞれの地域の特色や多様性を理解することも課題のひとつでした。

参加者は実施前に計6回の事前学習をおこない、各自の関心をもとにグループワークをおこない、訪問先での質問を用意するなど、入念な準備ののちに現地に向かいました。

## 2 日程・訪問先

### 都市の発展と再生 (3/12、ブレーメン)

最近のドイツでは、都市の地区ごとにその歴史的な特性を活かしつつ再開発する大規模なプロジェクトがおこなわれています。FSの前半のブレーメン市では、市の環境建設交通局の案内でこうした都市発展政策について集中的に学びました。旧市街を見学し、市のおこなったショッピングモールの整備事業などについて説明をうけたあと、都市発展の経緯についてレクチャーを受けました。さらに、現在進められているヴェーザー川沿いにあるかつてのブレーメン港の一角をオフィスおよび住宅街として再開発する巨大プロジェクトを見学しました。

### 高層団地の再生 (3/14 午前中、ブレーメン)

高度成長期に整備されたブレーメン郊外の大規模な高層団

地は、年月が経つにつれ、建物が老朽化するとともに治安の悪化に悩まされるようになっていました。そのひとつ Ote と呼ばれる団地は、市や NPO の援助のもと住民たちの主導で再開発がおこなわれ、建物を減築して高層住宅の規模を縮小したり、公園や保育園を整備したりといった方法でよみがえらせることに成功しています。実際に団地内を見学し住民と交流しながら、こうした住民参加によるまちづくりの実態に触れました。

再生可能エネルギーによる (3/13、オルデンブルク、クックスハーフェン)

ドイツは再生可能エネルギーの利用で世界の最先端にあります。また、スマートグリッドと呼ばれる次世代送配電網の整備も着実に進められています。

ここでは、ブレーメンの北に位置するオルデンブルク市にある地域電力会社 EWE 社を訪問し、同社のおこなっているスマートグリッド実証実験 eTelligence プロジェクトについて説明を受けたのち、その制御センターを見学しました。さらに、北海沿岸のクックスハーフェン市に移動し、スマートグリッドの一部として用いられている魚の冷凍倉庫や、風力発電機を製造している BARD 社の工場を見学しました。再生エコ建築 (3/15、ベルリン)

ドイツでは、使われなくなった古い歴史的建造物を取り壊すのではなく、修復して別の目的に利用する試みがよく見られます。本FSの後半のベルリンでは、その一例として環境に配慮した建築再生をおこない、会議場やイベント会場として運用している企業ベゾンデレ・オルテ Besondere Orte 社を訪問し、その実際を見学しました。

代替医療専門学校 (3/15、ベルリン)

医療の分野において、通常の西洋医学と平行して自然療法やさまざまなセラピーが代替医療として医療現場で積極的に用いられていることもドイツの特徴です。代替医療の専門資格である療法士を養成しているサミュエル・ハーネマン専門学校を訪問し、医療現場における代替医療の活用の実情について説明を受けました。

オブション・プログラム (3/16、ベルリン)

オブション・プログラムとして、ベルリン市内のバンコウ地区にある地区歴史博物館を訪問し、中世から現代に至るベルリンや同地区の歴史について学芸員の話をお聞きしました。

### 3 現場を“感じる”ことの大切さ

海外 FS では、たんなる物見遊山や視察旅行ではなく、日本とは違う社会・異質な他者をどこまで身近なものとして理解することができるかが大きな課題となります。本 FS では、ドイツ人とドイツ社会を参加者にいわば「原寸大」で理解してもらおうべく、できるかぎり現地の人々とふれあい、その生活の様子を自分で見て感じる機会を設けることを重視しました。ブレーメンでの宿泊先はユースホステルを利用したのははじめ、食事は原則グループに分かれて各自でとることにし、また市内移動の際は極力徒歩や公共交通を利用しました。また、質疑応答をふくめプログラムの全てのレクチャーは、逐次通訳によりドイツ側と一対一でおこないました。こうして得られた体験は、言語・習慣の違いを乗り越えて、参加者にたしかかな手応えを与えてくれたことと思います。

#### ■ 基本情報 【2012 年度実績】

日 程	2012 年 3 月 11 日～ 18 日
費 用	・ 約 200,000 円（航空運賃、宿泊費、現地交通費、燃油サーチャージなどを含む。但し、今後の行程に応じて若干の変動の可能性があります。）
参加人数	21 人



ブレーメン高層団地 Ote のマンション屋上で、住民主体の再開発への取り組みを聞く



ブレーメン中央駅前にて（中央は朝比奈先生）



クックスハーフェンの風力発電機製造工場



ブレーメン港再開発地区資料館でレクチャーを受ける



1年 齋藤 航輝

### 「高校の勉強と大学の学び、その違いは？」(参加コース:多摩川138kmをたどる!)

私は多摩川の下流域である川崎市に住んでおり、ぜひ源流も見てみたいという単純な理由でこのコースに参加しました。ただ参加メンバーの構成は、1年生は私含め2名のみ、そのほかはすべて先輩方で、社会人や大学院生の方もいらっしゃいました。計4日間の長い日程ですし、専門的な知識や教養の乏しい私についてはいけるだろうかと一抹の不安もありました。

しかし、小島先生や朝比奈先生、また先輩方が温かく迎えて下さり、私も何とかついていこうという気持ちで臨みました。現地に足を運び、人と出会い、語り、考える。そして、教員・学生・学年の垣根を超えて議論を戦わせ、問題に取り組む。この感覚は普段の講義ではなかなか養えません。

正解の存在する問題に取り組むのは高校までの勉強であり、正解の存在しない問題に取り組むことが大学での学びではないかと私は考えます。このフィールドスタディを通じて、大学での学びを堪能することができました。



2年 東原 早紀

### 「安心から得る信頼」(参加コース:A-企業とNPOが支える有機農業・B-企業家に学ぶCSR)

フィールドスタディで大切なものだと感じたのはステークホルダーの信頼が持続可能な経営に直接結びつくということでした。研究会(ゼミ)で「持続可能な経営」を一つの大きなテーマとして考えているため、今回のフィールドスタディは研究会のテーマを紐解く一つのヒントになったと思います。

まず、A日程では企業と農家とNPO、この3つの組織が結びつくことによってステークホルダーが安心し、地域に根差した経営で信頼関係を築いたということ伺いました。B日程では大原孫三郎氏の今にも受け継がれているその信念こそ、大原氏への安心と信頼の証と思いました。

持続可能な経営。この答えはもちろん一つではなく無限にあるものだと思います。しかし共通することは、嘘・偽りの蔓延る現在、世が求めている根本に「安心」があるということです。これは経営者とステークホルダーの「信頼」に繋がり、そして持続可能な経営に結びつくのではないかと今回のフィールドスタディを通し感じました。



2年 時友 彰吾

### 「石巻被災地FSの魅力」(参加コース:生業を中心とした地域社会のレジリエンス形成)

今回は私が行った石巻被災地FSの経験を報告させていただきます。大きな魅力としては二つありました。一点目は学生として参加させていただいたことです。受け入れ先の方々も自分達が学生であることを承知の上で様々な経験やお話をしてくださいました。学生である以上やれることに限りもありましたが、それを差し引いても学生としてボランティアに参加できた経験は大きいものでした。

そして二点目。普通のボランティアと違い年が近く環境に興味がある学生と一緒に学べたこと。他のボランティアでは様々な年齢や職業の人と話せるのが面白いのですが、FSでは環境についての色々なことをその場で話し合え、FSの経験をこれからの勉強にどう活かすのかが想像し易いのが良かったことだと思います。

ボランティアを始めてみたいけれど何があるか不安……、被災地のために何かしてみたいと思うけど何をしたらいいかわからない!という方は是非参加して見てください。

ボランティアを始めてみたいけれど何があるか不安……、被災地のために何かしてみたいと思うけど何をしたらいいかわからない!という方は是非参加して見てください。

※ 石巻被災地FS参加学生の詳しい報告は、人間環境学部Webサイト「東日本大震災への3つの試み」に掲載されています。



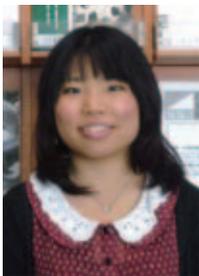
3年 王 文芳

### 「日本の自然」（参加コース：吉川FS）

私は、新潟県上越市吉川へ2012年8月19日から22日までの4日間、現地で学ぶフィールドスタディとして行きました。吉川は新潟県の南西にある中頸城郡の北東に位置する町で、日本海に面した山間地です。農業が盛んなこの地では、平らな場所には水田があり、そこで収穫されるお米は食用としても日本酒の原料としても有名です。また畑も多く、大根の種まきを体験させていただきました。きれいな水と空気の中での農作業は大変さよりも楽しい気持ちで体験できました。また、地場で採れる新鮮な食材でつくられた料理はどれも美味しく、五感で吉川の自然を感じることができました。

今回のフィールドスタディで一番感じたことは、地元のみなさんの温もりでした。日本と中国の関係が不安定と言われる時期でしたが、中国人留学生として地元の人に暖かく招待され、中国の農業やお酒などの話をして、距離感がゼロの感じは最高でした。ここでも再び吉川のみなさんに心を込めて感謝します。

留学生のわたしにとって貴重な4日間でした。



3年 碓谷 知里

### 「ドイツフィールドスタディ体験記」（参加コース：ドイツにおけるオルターナティブ運動）

私はこのコースに参加して、常に問題意識を持つことの大切さを学びました。

東日本大震災後、脱原発の意識が高まった日本での自然エネルギー普及に興味を持ち、自然エネルギーは本当に環境に良いのか、普及促進のためには何が課題なのかを学びたいと思い、このコースに参加しました。現地では自然エネルギー会社や風車製造工場を見学し、ドイツと日本では地形や気候、文化、技術、住民の意識など様々な違いがあり、ドイツの自然エネルギー導入の成功例をそのまま日本に当てはめようとしても成功しないということに改めて感じました。環境にいいと言われているから大丈夫、とメディアから得られる情報を鵜呑みにするのではなく、自分に対してどう思うのかを意識して行動していきたいと感じました。

また、事前学習や現地学習を通して、それぞれ違う目的意識を持ってこのコースに参加した学生たちと議論することができたので、多くの刺激を受けました。このコースで大切な仲間が増え、事後学習を終えた今でも時々集まって食事に行ったりしています。



4年 高橋 和太

### 「フィールドスタディ(FS)の本質」（参加コース：スリランカ・開発途上国の人々の暮らしと国際協力の現場を五感で知る）

FSでの報告をすると、聞き手は「肌身に感じた現地の状況」や「現地の方の話の内容」を聞きたいのだが、FSに参加した話し手は「その経験から生まれた感情や気付き」「考察の末に行き付いた答えやもどかしさ」を伝えたいという、ギャップが生じる。それはFSの本質に対する認識の違いである。

聞き手の聞きたい話もとても大切であり、報告を聞いて「考えるきっかけ」を得たい気持ちもわかるが、実際に参加すると教室で聞く話など目ではない。尋常ではない憤りや自分の無知さを感じ、頭の中で迷走させられる。さらに実際に現地へ行くと、その迷いをなかつたことにできなくなるのだ。つまりFSでの経験は、さらなる学びや考察、気付きを得る「きっかけ」に過ぎず、そこから考え、議論するプロセスにこそ、FSの本質があるのだと私は考えている。

普通の旅行ではまずできないFSでの経験は、単位をもらったところで終了になどできない、問題を突き付けてくるものなのだ。



**HOSEI University**